
ストロベリーパフェ

いちご

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ストロベリーパフェ

【Nコード】

N4961A

【作者名】

いちご

【あらすじ】

高校2年生の藍梨は、最近バスの中で出会った“彼”の事が気になるようになった。これが恋なのかわからないけど、何かキラキラしているキレイなものを見つけた気がした。

涙のチヨコレートパフェと、彼との出会い（前書き）

初めて書く小説なので、まだまだわからないことだらけですが、高校生のピュアな恋愛を書けたらいいなあと思ってます！！

涙のチョコレートパフェと、彼との出会い

「うゝえーん！藍梨【あいり】いゝ」

結希【ゆき】がすごい顔で泣いている。

ここは、あたし達が学校帰りによく寄り道をしている喫茶店。

結希の泣き声に店のお客さんがこっちを見る。

「うわっ！恥ずっ！」

あたしは内心そう思ったけど、口には出さなかった。

結希はと言うと、そんな事には全く気付いてないみたいで、泣きながら大好きなチョコレートパフェを頼張っている。

結希が泣いている理由…それはいつも決まって彼氏の事。
結希の彼氏は浮気性だ。だから結希も大変なんだろう。

「結希」。そんなに泣くくらいなら別れちゃえばいいじゃん」

「絶対ムリ！だってめっちゃめっちゃ好きだもん！」

こつということがある度に今みたいな会話が繰り返される。

ハア…。ホントにこの子は…。

結希とあたしは喫茶店を出て

「ばいばーい」
と言って別れた。

それからあたしは歩いて駅に向かった。

今日はあの人いるかな？

“あの人” っていうのは、今あたしがすごく気になってる人。たまにバスと一緒にいる男の人だ。高2になってからよく見かけるようになった。名前もわからないし、話したこともない。

ただ、あの日
彼を初めて見たときから、あたしは毎日彼のことを考えるようになっていた。

春のあったかい陽の光がバスの窓から彼の茶色い髪を照らしていた。それはとてもキレイで、キラキラしていて、あたしは思わず見とれてしまった。

10分もしない内に駅に着いた。
“彼” がいた。

彼の名前

彼は携帯をいじりながらバスが来るのを待っていた。
あたしはさり気なく彼の斜め後ろに立って横顔を見つめていた。
彼と同じ時間に同じ空間にいることが出来るのが、何だかとても嬉しくて、笑顔がこぼれそうなのを必死でこらえた。

大学生かなあ？専門学生かなあ？身長は170cmくらい？
そんな勝手な彼への疑問が頭の中でどんどん作られていく。
知りたいなあこの人の事。。。その時、

「洋輔【ようすけ】じゃん！」
と、ギターみたいなのを背負った男の人が“彼”に近付いてきた。
「悠【ゆう】？！久しぶり〜！」
彼が応える。

この人、洋輔って名前なんだあ 二人は友達なのかな。話し声が聞こえてくる。悠と呼ばれた人が

「お前彼女は？」

と聞いた。えっ！か、か、彼女？！

「ん？いないよ。」

いないんだ〜良かったあ。

「お前昔からそうだよな〜。告られても絶対NO。折角モテるのにもつたいないよ」

モテるのかあ〜…

「だって別に好きな女の子とかいなかったし」

「んな事言っちゃって〜。なあ！今から家来ない？すぐ近くだし」
「いいよ。」

そう言うと、彼と悠さんは駅を出て行ってしまった。
あたしは帰りのバスに乗ってる時も、家に帰った後も、彼の名前と

彼に彼女がいないう事を知ることができた喜びで、顔がゆるみっぱなしだった。（はたから見たらキモイと思う。。。）

だけど…心配な事がひとつ。彼 洋輔さんはモテる（らしい）のに彼女を作らないみたい…。あたしが彼女になるのは相当難しいってことおゝ？！てか、ムリ？？？

ああ…なんか現実を突き付けられた感じ。

でもでも！今日は洋輔さんの声を聞けただけでかなり幸せだった

あたし、恋してるんだ。

初めてのお喋り

次の日、あたしはこの恋を結希に話すことにした。

結希とあたしは幼稚園の頃からの親友だ。結希は中学の時に引越してしまったけど、それから一緒に遊んだりしていた。今では一番信頼できる相棒みたいな存在かな

放課後、あたし達はいつもの喫茶店でまったり。

あたしは大好きなストロベリーパフェを頼んだ。結希は昨日と同じくチョコレートパフェ。

ガラスのテーブルに自分の顔が映っている。今日は少し頬がピンクがかっているような気がする。

「で、話って何何？」

結希がきりだした。

「あのねえ、実は好きな人がいるのっ！」

「マジい?!」

それからあたしは、好きな人がバスでよく会う人だとか、髪がすごくキレイだとか、時間も気にせず彼のことを語りまくった。

ちょっと遅くなっちゃったなあ

結希と別れて駅に向かう。

今日は洋輔さんに会えないかも…。会いたい。素直にそう思った。その思いが届いたのか、駅に着くと、洋輔さんがいた。

やったあゝ！神様ありがとうっ!!!心の中で思わず叫んだ。

駅のバス停には洋輔さんとあたしだけ。あたしはまた洋輔さんの斜め後ろに立つ。

この状況を結希に伝える為に携帯を取り出そうとした。

チャリーン

携帯と同じポケットに入れていた指輪を落としてしまった。指輪は洋輔さんの足元に転がっていく。

ヤバイ!どうしよう。。。すると、

「はい、どうぞ」

あたしには眩しすぎる笑顔でそう言って、洋輔さんが拾ってくれた。

「あつ、ありがとうございますっ!」

今にも飛び出てきそうな心臓のドキドキがバレないように…っと思っただけこんな声引っ繰り返したらもろバレだよね…。

洋輔さんは、テンパってるあたしを見て、あははって優しく笑った。

「可愛いなあ」

笑いながら洋輔さんが言う。

「えっ?!」

何言ってるんですかっ!!あなたの方がかっこ良過ぎですからっ!!

その後すぐにバスが来て、結局それ以外は何も話せなかった。
バスを降りてから、さっきの出来事を結希にメールで報告した。

『良かったじゃーん 一歩近付いたね!』

と返信が返ってきた。

あれは夢じゃないよね?一応頼をつねってみた。現実なんだ、と確認する。

洋輔さんと話せた 嬉し過ぎて涙が出そうだよ。もう完全に恋の病にかかっているね。

「可愛いなあ」

って言うてくれた時のあの笑顔が頭の中に広がる。とても“好き”なんて言葉じゃ言い表わせないくらいスキ。どうしてこんなに好きなのか自分でもよくわからない。

ただ、愛しくて仕方がなかった。

ありがとう

今日は朝からルンルン気分で登校した。

教室では結希がにやにやしながら待っていた。

「藍梨ちゃん。今日は爽やかな笑顔で登校ですねえ」

「えへへ」 洋輔さんのこと考えると顔がゆるんじやうんだよね」

昨日少し喋っただけなのにもうすでに幸せボケしちゃってます（笑）。あたしは学校であまり男子とは話さない。中学に入ってから、変な距離を置くようになってしまった。

だから男の人には免疫が無くて、昨日みたいな事になったんだけど

「あたしも、嬉しいお知らせがあるの！実は今日、学校終わったら彼氏とデートなんだ」

「仲直りしたん？」

「うん！なんか、あたしの勘違いだったらしくて」

あ、そうですか。いつものことだから慣れてるけどさ。

結希達はなんだかんだ言って1年以上付き合っている。あたしも洋輔さんと付き合えたらどんなに嬉しいことか。。。

幸せオーラを振りまきながら、学校での1日を過ごした。

放課後、今日もいるかな？と思ったけど、恋ってそんなに簡単に上

手くいくもんじゃないんだって、洋輔さんがいないバス停に教えられた。

いい事は毎日続かないんだよね…。

よし！明日があるもんね！！大丈夫

1日でも君に会えないと、すっごくさみしいよ。

早く明日にならないかなあ…

洋輔さんの事を考えながら、バスを降りてぼんやりと家まで歩いた。

玄関のドアを開けた瞬間、携帯のバイブが鳴った。

『ねえねえ！もしかして藍梨の好きな人って洋輔って名前?!』

結希からのメールだった。でも、どうして洋輔さんの名前知ってるんだろう？

あたしは

『そうだけど…なんで?!』
と返信した。

すぐにメールが返ってきた。

『その人、彼氏の友達なんだって!』

『ホントにあたしの好きな洋輔さんのの?』

『ホントだよ だって昨日藍梨が見た、ギター担いでた男ってあたしの彼氏だもん』

『マジですかっ?!』

『うん! 彼氏にその人の事色々聞いてみよっか? 明日学校で伝えるよ』

『ありがと 明日楽しみにしてる』

結希、あんた最高の友達だよぉ!!!!

その日は結希に感謝しまくって眠りについた。

卒業アルバム

次の日あたしは、結希が彼氏に借りてきてくれた高校の時の卒アルを見せてもらった。

そこにはまだ髪が黒い洋輔さんが写っていた。

だけど、髪質は今と変わらない、柔らかそうな髪だった。

今まで知らなかった洋輔さんがいるような気がして、わくわくしながらページをめくった。

「あ。」

発見してしまった。

「ん？どーした？」

結希がアルバムを覗き込む。

あたしは、洋輔さんと知らない女の人が仲良しそうにピースをしている写真を指差した。

「何？ヤキモチ？」

結希がにやけながら言う。

「うん。」

「素直でよろしい。」

そう言うと、結希はあたしの頭をぽんぽんと撫でてくれた。

「でもアイツ、洋輔さんは彼女作ったことないって言ってたよ。」

アイツと言つのは結希の彼氏 悠さんのことだ。

「それでもこんなに仲良く写ってる写真見たら凹む
あたしは机に顔を伏せた。」

どうしてこんな小さい事でイヤになるんだろう？これが恋ってモノ
なのかな…

その日一日は少しブルーだった。

どうして些細なことを気にしてしまうのか
どうしてこんなに嫌な気持ちになるのか

どうしてこんなに好きになってしまったのか

なんだか解らないことだらけでずーっと悩んでいた。
帰り道、結希が突然、

「アイツに洋輔さんのアド聞いてみようか？」

「え。でも、いきなりどこの誰かもわかんない人からメール来たら
キモくない？」

正直、すつごく知りたかった。本心とは逆の事を言っていた。洋輔
さんに迷惑だと思われるのがイヤだったから。

「そんな遠慮するなよ。大丈夫だって！今アイツに聞いてみるか
らさっ」

そう言つて結希は携帯を取り出してメールを打ち始めた。

この調子だと悠さんも、あたしが洋輔さんを好きだって知ってるんだろうな。

結希のバイブが鳴った。

「教えてもらったよあ！メール送るか送らないかは藍梨次第だからさつ。アイツも藍梨のこと応援してたし、口かたいから洋輔さんにバれる事はない」

「ありがとう！彼氏サンにもそう伝えといて」

「どう致しまして。ウチら恋のキューピッドみたいじゃん?!」

それから結希と別れて、いつものように駅に向かった。
駅には、あたしの大好きな人がいた。

あたしが近くに行こうとしたら、洋輔さんがこっちに気付いたらしく、

「この前の高校生だっ」

と言ってイタズラっぽく笑った。

それって、も、もしかしてあたしのこと????

「えっ。あ、あの…」

あたしが慌てていると、

「アハハ また一緒のバスだね」

またあの爽やかな笑顔であたしに言う。

「そうですね」

緊張して一言しか言葉が出てこない。妙な笑顔になっているかもしれない。

もっと話したかったのに、バスが来て会話は遮られた。

あんなに人懐っこいとは思わなかったなあ。

帰ってからベッドに寝転がってそんな事を思った。

もっと話してみたい。彼をもっと知りたい。

また一歩近付けた ブルーだった気持ちが一気に吹き飛んだ。

ちなみにこの日、洋輔さんにメールを送らなかった。勇気が出なくて。。。

彼の名前、あたしの名前

この前まで春のポカポカ陽気だったのが、今では夏の暑い陽が射している。

あれからあたしと洋輔さんとは全くと言っていいほど進展が無い。

ハア。いつになったら近付ける日が来るんだろう？？

夏休み間近の教室の中は、ビタミンカラーみたいな派手な原色のカラフルな色で彩ったように、クラス全員が浮かれている。約1名以外は。

あたしは机に伏せてぼーっと窓の外を眺めていた。

「藍梨」。何つまんなそうな顔してんの？」

結希だ。

「だってえー。あたしはみんなみたいにダーリンがいる訳じゃないし。夏休みになっても宿題に追われるだけの日々だもん」

「そんな悲しい事言うなよー。いつそのこと、例の彼に話し掛けちゃえばいいじゃん？」

「そんなサラツと言わないで」

あたしだって何回もそうしようとしたけど、寸前で勇気が無くなるんです！

「あんたはこういう事になるとホント消極的っていうか、マイナス

思考ってどうか…」

結希が呆れたという顔であたしに言う。

そんな事言われてもなあ。

最近洋輔さんを見かけないせいか、あたしはパワー不足で、目があらぬ方向を向いているのが自分でもよく分かる。
恋の病。重症です。

今日もいないんだろうな。

放課後、教室の掃除を終え、駅に行った。

ん？…あつ！

いた！あの人が！！喜びで飛び上がりそうだった。

今日こそ話し掛けてみよう。このまま何も進まないのは良くないよね！

「あの〜…」

「はい？あつ。また会ったね！あの子でしょ？」

「はい！」

嬉しい！覚えててくれたんだ。

「どうかしたの？」

そうだ。何も考えないまま勢いで話し掛けちゃったよ

「あ、あの時、指輪拾ってくれてありがとうございました！」

何とか理由を見つけてそう言うつと、

「どう致しまして そんな大したことしてないのに」 って笑ってくれた。

その笑顔、素敵すぎます！

「名前、なんて言うの？」

「水野藍梨です！ 藍色の‘藍’に、山梨の‘梨’で藍梨！」

「へえー。可愛い名前だね 俺は、相川洋輔って言うんだ。」

相川って名字なんだあ！名前までかつこ良く思える。

「あ。バス来たね」

洋輔さんはバスに乗ると、自分の席の前を指して

「ここ座る？」

と言ってくれた。

あたしは勿論そこに座った。

バスの中で、悠さんがあたしの友達の彼氏だつてことや、洋輔さんは大学生つてこと、悠さんと洋輔さんは中学の頃からの友達つてこと、いろんな話をした。

楽しい時間はすぐに過ぎてしまう。洋輔さんが降りるバス停に着いて、

「バイバイ」

と手を振ってくれた。

あたしも

「さようなら」

と手を振った。

思い切って話し掛けて良かった。

自分で自分を誉めてあげたい。中学の時から男の人になんて自分から話し掛けたことなんて無かったから。

家に帰ってからドキドキしっぱなしで、その夜はなかなか眠れなかった。

中学の頃の記憶 空ケン

終業式

校長先生の長くて有り難いお話が終わり、2学期最後のホームルーム。

担任の先生から通知表を受け取る。あたしはかろうじて赤点を免れた。

「水野！。どうだったー？」

後ろの席の日向空【ひゅうが そら】君だ。

「なんとか大丈夫だったよ。空君は？」

「俺も赤点は無かったな」

「てか、空君はいつも成績いいでしょ！」

「そんな事ないって」

謙遜してるけど、この人は本当に頭がいい。クラスで中の下のあたしなんかじゃ到底相手にならない。

あたしと空君は、中学が一緒だった。背が高くて頭も良くてバスケット部の部長もやっていた空君はモテモテで、女の子に告られるのは日常茶飯事だった。（勿論それは高校に入った今も変わらない。）

中3の頃の体育祭の日、あたしはケガをしてしまい、保健委員だった空君に保健室まで付き添ってもらったことがある。

「大丈夫か？」

「うん、まあ。」

男子に話し掛けられることがほとんど無かったから、うまく話せな

かった。

「水野ってさー、彼氏とかいるの？」

「えっ。いないよ、全然」

「そっか。良かった」

「？」

その時はそれで終わったんだけど、後から結希に話したら、

「それ藍梨の事好きって言ってるようなモンじゃん」
と言われた。

それから空君とはたまに喋る程度だったし、告白もされなかったから、あたしは結希の言葉を気にしていなかった。

自分のことを好きだなんて言ってくれる人がいるなら出会ってみたいよ…。

「藍梨っ。さっき日向君に話し掛けられてたね！」

ホームルーム後、結希がスキップしながらやってきた。

「別に普通の話してただけじゃん」

「やっぱさー、あの子絶対藍梨が好きなんだって！」

「そんな事はないと思います」

だって、あの空君だよ？！あんなにかっこいい、みんなの憧れの空君がまさかこんな凡人に恋するわけ無いでしょー！！

第一、あたしが好きなのは洋輔さんだもん

LOOK into 空

俺には、中学の時から気になる子がいる。

その子はいつも明るくて優しい子だった。奇跡的にも中1の頃から4年間同じクラスだ。

あの子は気付いてるかな？俺が昔から片想いしてること。

入学式で君を初めて見た時、俺は校長の話なんか全く耳に入らなくて、ただ君の横顔を見つめてた。

君が、君の友達の恋愛の為に一緒に泣いてあげてるところを見て、君の優しさがまた好きになった。

中3の体育祭。初めて君と話した日。君は気付かなかったかもしれないけど、俺はずっとドキドキしてたんだ。俺は心臓の鼓動を抑えながら君に言った。

「水野ってさー、彼氏とかいるの？」

「えっ。いないよ、全然」

「そっか。良かった」

最後の言葉で俺が好きってバレたかな？って思ったけど、そんな心配しなくて良かったみたい。それもまた悲しいモンがあるんだけどね。実はちょっと（いや、かなり…？）鈍感だったりして。

中学では君を見るだけでドキドキだった。

今日、少しだけでも君と話せた事で、俺はまた君に元気をもらえたんだ。

俺がどんな女の子に告られてもOKしない理由は、、、
君が好きだからなんだ。

最近、休み時間に、よく紺野結希と二人で男の話してるっぽいなあ。
。すぐ後ろの席だから聞きたくなくても耳に入ってくるんだよね。
好きな人でも出来たのかな…？あーっ！考えだしたら止まんねー。
気になってきた！！どこの誰だか知らないけど、俺は4年前から片
想い中なんだよ！

気持ちは伝えなきゃ伝わらないんだよな。よしっ！俺もそろそろ動き出さないとっ。

夏休み初日

夏休み。

あたしは初日からダラダラと宿題もせずに、寝転がってテレビを見ていた。

）

いきなり携帯が鳴った。結希からの電話だった。

「もしもしい」

「藍梨ー今日ヒマ？」

「ヒマだけど…何？」

「あたしもヒマ過ぎて死にそうだから今から遊ぼうー！」

「今からあ？ま、いつか。いいよ」

「よし！決まり！今から１時間後駅で待ち合わせねっ」

学校よりも気合い入れてお化粧をして、お気に入りの服を着て家を出た。

「あーいーりー！」

「結希ー」

あたしが到着すると、結希がもう駅にいた。

「ねえねえ！あたし藍梨がとーっても喜ぶもの発見しちゃったよ」

「あたしが喜ぶものー？」

「うん！あれ見て」

結希がホームの方を指差した。

あたしは指差すほうを見た。

「！！！！」

そこには洋輔さんがいた。

「ね！いいもの見つけたでしょっ？」

「うん！超感動！！」

洋輔さんの姿を見たらすっごく嬉しくなって、泣きそうだった。

「ちょっと、うるうるしちゃった？」

今にも泣きだしそうなあたしの顔を見て、結希が優しくそう言った。
「ヤバイよう。ホントに泣いちゃうかも」

何日も会ってないような気がした。夏休みは会えないと思ってたから、洋輔さんを見た瞬間、発作的に目に涙が溢れてきてしまった。

「大丈夫？！藍梨はあの人のこと本当に好きなんだね」

結希は優しく微笑んで、あたしの肩にポンと手を置いた。

「うん。大好き」

涙をぬぐいながらそう言った。

「藍梨、あっち行こっ」

どこに行くかも特に決めていなかったから、あたし達は洋輔さんがいるホームに行くことにした。

「洋輔さん」

「あ！この前のく、えくつと…藍梨ちゃんだっけ」

「そうです！良かった、覚えててくれて。あの時話した悠さんの彼女ってこの子なんですよ」

「初めまして！アイツの彼女の結希です」

「そっなん？！悠がお世話になってますー」

洋輔さんが、悠さんの保護者みたいな口調で言った。そのセリフに

あたしと結希は笑ってしまった。

「アハハ！洋輔さん面白過ぎですよー！」
とあたしが言うと、

「そう？そんなにウケた？」
つてとぼけて言った。

「洋輔さんはこれからどこに行くんですか？」

「俺はこれから悠のとこ行くんだよー」

「アイツの家行くんですか？！」

「うん 二人とも一緒に行く？」

「えっと…」

あたしが戸惑っていたら結希が、

「はい！行きます行きます！」

と助けてくれた。

こうしてあたし達は当初の買い物に行くという目的も忘れて、三人で悠さんの家に遊びに行くことになった。

アド交換

「えっ！何で三人もいるの?!」

悠さんは、洋輔さん以外にあたし達までくつついてきたので最初はすごく驚いてた。

でも洋輔さんが理由を説明すると、快く部屋に案内してくれた。

あたしは悠さんと会うのが初めてだったから、軽く自己紹介した。
悠さんは、結希にあたしのことを色々と聞いているらしく、あたしの座る位置を洋輔さんの隣にしてくれた。

そのお陰で心臓がバクバク音が鳴って、体中が燃えてるみたいに熱かった。

悠さんの部屋は、男の人にしてはとてもキレイに整理整頓されていて、モノトーンでまとめられていた。

あたしは男の人の部屋に入ったことがなかったから、少しワクワクした。

「洋輔と藍梨ちゃんは知り合いなん？」
と突然悠さんが聞いてきた。

「うん！もうかなり仲良しだよ〜」
洋輔さんがそう聞いてきたから

「はい！超仲良しですよねえ」とあたしは答えた。

「メールとかもしてるの？」

「そーいやまだアド交換してなかったね。聞いてもいい？」

「勿論OKです」

悠さんナイスです！！あたしが悠さんをチラツと見たら、洋輔さんに気付かれないように、結希と二人で小さくピースしてた。あたしも小さいピースを二人に向けた。

アドレスを交換しおわると、

「いつでもメールしてね」

と洋輔さんが言ってくれた。

なんていい人たちなんだ…。悠さんや結希、洋輔さんといい。こんなにいい人達に囲まれてあたしは幸せ者です。

この日はみんなであわいもない話をして終わった。

アドレスを交換しただけで、あたしにとってはすごい進歩だった。

あたしは洋輔さんのアドレス知ってたけど、なかなかメールを送る勇気が出なかったから。

これから洋輔さんとメールが出来るなんて夢みたい！！

宿題と親友と。。

あゝ。どうしよう。

あたしがどうしてこんなに悩んでいるかというと…

夏休みの宿題が何も終わってないから。

まだひとつも手を付けていない。夏休みもあと10日しかないっていうのに。

あつ！こんなときは…

『結希！宿題手伝って』

あたしは結希にメールを送った。

『またあ？ま、いいよ。今から藍梨ん家行くね』

やっぱりあなたは良い親友だよ！！

「お邪魔しまーす」

結希だ！あたしは自分の部屋がある2階から階段をかけ下りた。

「どうぞ〜上がって」

それからしばらく結希とあたしは大量にたまっている宿題と戦った。結果は見事に勝利。ほとんど結希が問題を解いてくれたんだけど…。

宿題が片付いて、あたしと結希はジュースを飲みながらテレビを見ていた。

その時、

「藍梨さ〜、洋輔さんとメールしてる？」

結希が突然、質問してきた。

「え」

あたしは動揺してそれしか言えなかった。

「やっぱしてないかー。夏休みなんだから遊びに誘ってみれば？」
「うん」

それができれば苦労しないよ。結希みたいに可愛かったら積極的に誘えるかも知ないけどさ。

「あさつて夏祭りじゃん！一緒に行けば？」

そっか！そんなものがあつたんだっけ。もう2、3年行っていないから忘れてた。

「洋輔さんOKしてくれるかなあ・・・」
「そんなのやってみなきゃわかんないじゃんっ！」

結希はあたしを勇気づけてくれた。

「今日メールしなよ」
「うん！頑張る！」

結希が帰ってから、あたしは近くのCDショップに出掛けた。
あたしがCDを選んでみると、

「あれ？水野？」

という声が聞こえた。

聞き慣れた声だったけど、誰だろ。あたしはその声が見上げた。

「あーっ！空くん！！」

帰り道

「水野ってさー、」

「何？」

「彼氏とかいんの？」

「えっ！？いないけど…」

CDショップからの帰り道、空くんがそんなことを聞いてきたからすぐくビックリした。

「そ、空くんは彼女いないの？」

「俺？いないよ。中学ん時からずっと好きな子いるからさ」

「そーなの！？じゃあ、あたしの知ってる子だよねえ」

「うん。水野は絶対知ってる」

「誰だろお？？教えて？」

いくら考えても、空くんが好きな人の見当がつかなかったから、空くんに直接聞いてみることにした。

「秘密」

「意地悪」

あたしはほっぺを膨らませた。

「そんなに知りたい？」

「知りたい！！」

「どーしようかなあ」

「お願い！！教えて？」

「……よし、分かった！」

「教えてくれるのっ？」

「うん！てか水野可愛すぎなんだけど」

「え？」

「教えて？って言ってる姿が」

空くんは笑いをこらえながらそう言った。

何言ってるの！？空くん！やばい…顔が熱くなってきた。恥ずかしくて俯いてしまう。

空くんがあたしの顔を覗き込んだ。

「水野、顔赤いよ？」

「いやあ。だって男の子に可愛いとか言われたことないし」

「やっぱ水野って可愛いね」

それ以上言わないで。顔が林檎になる。

「そうだ！空くんの好きな人の話してたんじゃん！誰なの？」

あたしは話をすり替えた。

「じゃあさ、教えてあげるから、あの公園でちよつと話さない？」
空くんは誰もいない近くの公園を指さした。

なんか公園で二人きりって緊張するなあ。

そう思いながらも、あたしは

「いいよ」

と返事をした。

公園にて

あたし達は公園のブランコに腰を掛けた。

さっきまで暑い日差しが眩しかったのに、夕方になると陽も落ちて涼しい風が気持ち良かった。

「俺さー、」

空くんが話し始めた。

「中1の時から今までずっとその子と同じクラスでさ、」

ってことは高校も同じなのかなぁ。

あたしは時折

「うん」

と相づちを打ちながら話を聞いた。

「まだわかんない？」

「え！？全然わかんない」

そのヒントだけじゃわかんないよ。

「水野のことだよ」

「え。どういう意味？」

まだあたしは状況が飲み込めていない。

「水野のことが好きなんだ」

空くんは優しく言った。

月明かりがあたし達を包む。長い沈黙。

驚いて声が出なかった。あの空くんがあたしのことを…？

「あたしは、ね、」

やっと声を出すことが出来た。

「空くんのこと、本当に懂れてるし、優しくて頼りになるし…大好きだよ」

「じゃあ…っ」

「でもね」

あたしは空くんの声を遮るように言った。

「それは友達としてなんだ。」

「…そっか」

「ごめんね」

「水野が謝ることないって！」

空くんは笑顔であたしに言ってくれた。

「俺ふられちゃったけどこれからも友達でいてくれる？」

「当たり前じゃん!!」

「マジで！ありがとうっ！水野の一番の友達になれるように頑張るから！！」

それからあたし達は月明かりと街灯に照らされながら、一緒に帰り道を歩いていった。

実感

「あゝあ。日向くん今頃泣いてるね」

「いや、大丈夫だって！傷つけないように断ったもん！」

「いやゝ、女って恐いわゝ。可愛い顔してあっさり断るなんて。中学のときから片思いしてた子に振られたらへこむなあゝ」

「うう…それ言われると痛い…」

あたしと結希は久しぶりに、学校帰りによく寄り道していた喫茶店“メイプル”に来ていた。

そこで昨日の出来事を結希に話したらこんなことになってしまった。

「冗談だって 日向くんはモテるから大丈夫!!」

「そっいつ問題?!」

「そーゆー問題っ」

あたしの質問を無視して結希はひとりで盛り上がっている。

「だって藍梨には洋輔さんと言う王子様がいるんだもんね」

「うん…／／／」

「そっいえば、夏祭りのこと洋輔さんに言っただ？」

夏祭り……？なつまつり……。

「あゝ！！！」

「ちょっと藍梨ちゃん。あたし昨日ちゃんと言ったよね？メールしなさいって」

「はい……。」

呆れたという顔でこっちを見る結希。

「おっちょこちょいっていうかドジって……。まあいいわ。今メールしな！」

「なんて送ればいいの？」

「明日夏祭りがあるんですけど一緒に行きませんか？って」

「わかった」

バッグの中から携帯を出して早速メールを打ち始めた。

『洋輔さん、お久です いきなりなんですけど、明日うちの近くで夏祭りがあるので良かったら一緒に行きませんか？』

送信

「送信完了しました！」

「よくやった！ご褒美にストロベリーパフェおごってあげる」

「ホントに？！やったあ！！！」

「食べながら返信を待とう」

10分後。

着信音が鳴った。あたしはすぐに携帯を開いた。

「洋輔さんだっ!」

「で?なんだって?」

「『夏祭りいいね!!一緒に行き』だつてえ!!!!」

「マジで?!良かったじゃん!!」

「うん!良かったあ 嬉しい」

洋輔さんからの1通のメールだけでこんなに嬉しくなるなんて。。。あたし恋してるんだなゝって実感した。

「結希達は夏祭り行かないの?」

「行くよゝ ねえねえ二人で浴衣着ていかない?」

「着ていく!!」

「よし決まり!じゃあ駅で待ち合わせて、それからそれぞれ別行動にしようか」

「了解」

あたしは洋輔さんに、結希は悠さんに、待ち合わせ場所をメールで報告して、二人を驚かせるために浴衣を着ていくことは内緒にして

おいた。

明日はいい日になりそうだ

夏祭り？

こんなにドキドキするのは人生初かも知れない…。

今日は夏祭り当日。

つまり、あたしの勝負の日。（笑）

あれから結希と一緒に浴衣を買ってこの日に備えた。

結希は黒地に白い花柄の浴衣。最初は、大人っぽ過ぎないかなあゝって言ってたけど、あたしは結希の綺麗な顔立ちにはすごく似合っていると思った。

あたしの方かというと…。結希が選んでくれたピンク地にパステルカラーの水玉の柄の浴衣。

あたしは結希と違って見た目が子供っぽいからこういう色しか似合わない…。そんな自分が情けなくなる。。。はあ

あたしのロングの黒髪を結希が器用にまとめてくれる。そこにかんざしをさして、

「はい、完成！」

「ありがとうー！！結希は何にもしないの？」

「あたしは髪短いからこのまんまでいいの それより藍梨いゝ、これで洋輔さんもメロメロだね」

と結希は悪戯っぽく笑った。

「あはははは…。そうだいいけど…。」

「ちょっと藍梨大丈夫??? 壊れ始めてない?!」

「不安と緊張でおかしくなってる・・・」

「大丈夫だよ!! 藍梨めっちゃ可愛いもん!! 自信持つて もしかしたら洋輔さんに告られたりするかもよ」
にんまりと笑う結希。

そんなことあるわけないって!! でも本当にそうならいいなあ。
なんて淡い期待を抱きながら、あたしと結希は待ち合わせの駅に向かった。

やっぱり緊張する。 洋輔さん驚くかな

夏祭り？

「お待たせ」

「二人とも浴衣だー！」

悠さんが結希の声に気付いて手を振り返してくれる。

「お待たせしましたあー！」

あたしも走って二人が立っているところへ行く。

「いいよ。俺たちも今来たとこだし。それより浴衣、可愛いね」
洋輔さんがニツて笑って言った。

今・・・

洋輔さん・・・

可愛いって言った？！

マジですか？！

すっごい嬉しいです！！笑

「どーしたの？」

固まって放心状態のあたしに、心配そうに洋輔さんが顔を覗き込んだ。

「えっ？ああ！何でもないですう・・・／／／」

「そお？ならいいけど…。うちらもそろそろ電車乗ろっか」

「あ、はい！」

気付けば隣にいたはずの結希と悠さんはもうすでにいなかった…。
いつのまに…???

電車の車内にて

電車の中はお祭りに行く人たちで満員で、結希達ともはぐれてしまった。

そして今のあたしの状態はというと…。

近い！！

近すぎです！！

あたしは電車のドアの前において、洋輔さんは向かい合わせであたしにかぶさるように立っている。

心臓バクバクですww

「藍梨ちゃん大丈夫？」

「はい／＼／　　何とか…」

本当はぜんぜん大丈夫なんかじゃないけど

恥ずかしくてまともに洋輔さんの目を見れない。

「もうすぐ着くからそれまで頑張る」

「はいw」

こんな近くで話すの正直照れるんですけど（笑）

心臓の音が洋輔さんに聞こえないように、一生懸命平然を装った。ただ顔は茹でダコみたいに真っ赤だと思う…

そんなこんなでやっと目的地に着いた。

好きだよ（前書き）

長い間休んでてごめんなさい。・囚・・。・

好きだよ

お祭りの会場になっている神社は、人々の熱気と騒めきで溢れていた。

「混んでるなあ」

「そうですねえ」

やっとお祭り会場に着いたあたし達は、人の多さに少し（かなり？）驚いていた。

「じゃあ行こっか」

洋輔さんはあたしの手を握ってそう言った。

「はいッ／＼／」

「手、嫌かな？」

「全然嫌じゃないです！」

「そっか。良かった」

あたし達はいくつも立ち並んでいる屋台の中を歩いていた。

ヨーヨー釣りの屋台の前を通りかかったとき、可愛いピンクのヨーヨーが目に入った。

あれ可愛いなあ……

「藍梨ちゃん何したい？」

「え、えつと……」

「俺ヨーヨー釣りしてもいい？」

「えっ……あつ、はいっ」

「よしっ！」

そう言つて洋輔さんは5回くらい挑戦して、偶然にも、あたしが欲しがっていたピンクのヨーヨーを取った。

「やつととれたあゝ」

「良かったですねッ」「藍梨ちゃんがすごく欲しそうだったから頑張ってみた」

「えっ…?」

あたしのために…?

「藍梨ちゃんわかりやすいんだもん」

「すごく欲しそうだったからさあ」

洋輔さんは笑いながらそう言った。

「ってことで、はい！プレゼント」

「あ、ありがとうございます!」

あたし達はそのあといろんな屋台をまわって、夜遅くなってきたから帰ることにした。

行きと同じく満員の電車で揺られてあたしの方の駅に着いた。

「この時間だと終バスだね」

「そうですね」

・・・。

どうしよう…会話がなくなっちゃった…。

何か話さなきゃ！

何か…

「藍梨ちゃん」

「は、はいっ」

「俺さ…」

「はい…？」

「好きだよ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4961a/>

ストロベリーパフェ

2010年11月19日16時58分発行